



本当に爽やかないいお天気で散歩日和でありますけれども、その時間をみんなでつくっていく社会づくりを考えようというのでこれだけの皆様方においでいただきました。本当にお目にかかれてうれしく思います。

私のほうから1時間、一緒に社会をつくっていきましょうというメッセージをプレゼンテーションいたしまして、私の後のパネリストがとっても魅力的な方々がそろっておられます。いろんな事例も出てくるかと思えます。両方合わせてどういうふうにし新しい生き方をつくっていくのか考えていきたいと思えます。

○人の役に立つ、新しい高齢者の生き方

今日、私が申し上げたいメッセージは、高齢者の新しい生き方をつくり出していかなきゃいけない。そういう新しい生き方をつくり出す先兵として、「私たちがそういう社会づくりを一緒になって切り開いていきましょう」というのが私のメッセージであります。

高齢者の新しい生き方っていうと抽象的なようですけど、その能力がある限りは、人の役に立っている社会をつくっていく、そういう生き方をするのが新しい生き方であろうと思っております。うちに引っ込んでぬれ落ち葉とかいろいろ言われておる生活、これはもう寂しい限り、本人も不幸。ただ、旅行を楽しんでいるだけというの、これもあんまり幸せとは思えない。旅行ばかりしている人にも会いますが、大体10回ぐらい行くと夫婦げんかが始まりまして、20回行くともう行くのも嫌と。自分の楽しみだけではなかなか生きているという実感がつくり出せない。それぞれの能力がいろいろあるわけですから、これを人のために役立てるといふ、そういう生き方をしていくのが大切だろうと。きっとそういう生き方をもう既にされている方ばかりの集まりだと思いますので、安心してもう少し突っ込んで言いますと、そういうことをする、人様の役に立つ能力を持っているのに役立てずに自分のことだけしているという生き方は恥ずかしいと感じるような文化をつくり出したい。そこまで踏み込みたいと思っております。

こういうことを言うと嫌われるわけで、「自分の生き方は勝手だろう」と。「今までさんざん働いてやってきて、やっと好きなことをして生きようと思っているのに、余計なおせっかいだ」と、そういう押しつけがましいことは御免だと感じる方のほうが多い。今さらそんなことを言われたくないという反発が結構強いわけでありまして、ですから今まで23年間ボランティア活動を広める活動、助け合いを広める活動をやってきていますけれども、そこは少し控え目に、こういう活動をやったら楽しいですよ、あなたの人生、御家族の人生、いい人生になりますよと、そういう進め方をしてきたわけでありまして、どうもそういう優しい言い方では間に合わない社会になってきた。ここに内閣府も「全員参加型」と銘打たれました。これはかなり大胆な命名ですよ。全員参加しましょうと言っているのですから。私でもなかなかそういうことを言わずに遠慮しながら「気持ちのある方は」という言い方をしてきた。全員参加型と、しかも内閣府で打ち出したわけですから、これを打ち出した人は偉いなと思えますね。もうこれしかない、そういう社会になってきたと思えます。

○エネルギー源として的高齢者

高齢者が長生きになっていいことですが、どう支えるのか、第一にそこが問題になるしお金もかかる。これからもどんどんかかるようになっていきます。年金にとどまらず医療費、介護保険費、すごい金額になっていく。国も地方自治体もお金がないのでこのままでいいたら負担し切れなくなる。お金じゃやれなくなってくる。じゃあ姥捨てにするかと、これはもう絶対だめです。人類は常に進歩して、幸せに向けて歩んできているわけですから、この文明社会姥捨てはできない、後退はできない。じゃあ前に進むにはどうするのか。国がお金を使ってやるのが難しくなってくれば、あとはそれぞれがエネルギー、持っているいろんな能力を提供して、そのいろんな能力を集めていい社会にしていく。助け合いをやり、人を支えていく、困っている方々を支えていく、それしか方法はない。

じゃあエネルギーはどこに余っているのか。子供たちは学校と塾でひーひー言っています。学生もひーひー言っています。若い人たち、自分の子育て、あるいは家庭を維持するので手いっぱい。そうやってきたら余っているエネルギーは高齢者。仕事を引かれた高齢者、このエネルギーと、子育てを終えられておうちにおられるお母さん方、お父さんもこのごろは出てきています。そのあたりしかもうエネルギーは残

っていない。お金もない、残っているエネルギーはそこしかない。だからそうやってきたら、全員参加型しかない。

○変わりゆく介護保険制度

世の中の福祉の仕組みが期せずしてその方向に、去年から今年にかけてずっと動いております。まず、その点を確認したいと思うのですが、一つは、高齢者介護保険制度、これが今年の6月に法律が通って変わります。幾つか変わる点があるのですが、大きいのは要支援者、要介護者に比べて比較的軽い方々の支援、これを介護保険制度で支えていたのを介護保険制度から離してその生活を支える部分、これを市町村にやっていただきます。その市町村も従来のお金でやる仕組みではなく、なるべく地域の支え合いで要支援者の生活ぐらいは支えてくださいよと、そういうふうに変った。

2013年8月の社会保障制度改革国民会議。審議会よりももう一つ上のレベルの審議機関で、方針が打ち出されてそれが具体化されて、「要支援者助け合いで生活支援をやりましょう」となった。その仕組みづくりにより各市町村一生懸命やっているところです。

今まで助け合いを国全部で支える仕組みの中核に据えようというのは、行政の仕組みとしては恐らく初めて。だから、これはそういう目で見れば非常に大きな基本的な転換です。行政から言えば、やっぱり公平に全国一律に全部やらなきゃいけないことを助け合いに頼むっていうのは心配なことですよ。

おわりのとおり助け合いっていうのは志でやるものですから、全国一律にやってくださいと言ったってやりませんよね。私も23年間助け合いを広めるのをやってきましたが、進んではおりますけど、とてもあと2年半、3年の間で29年の4月までに全国一律助け合いの仕組みをそろえましょう、そんなことはできません。これはお金の仕組みをつくれれば事業者が手を挙げて全国一律の仕組みができるのですが、個々にお金を出すわけじゃない、気持ちでやってもらうわけだから、この世界、結構ひねくれもんもいて、今日の会場にはおられないと思いますけど、助け合い、それをやれよと。その気になればすごいですけれど、行政にとにかく言われてやりたくないとおへそが曲がってしまうのですよね。かえって逆効果になり、全員参加は無理な仕組みなのです。

だから今まで助け合いでやりましょうという、一律にやる仕組みをやってこなかった。けれど、もう背に腹はかえられない、介護保険料をどんどん上げていかなきゃいけない、とてももう負担してもらえないだろうと。ここはやっぱり可能な限り助け合いに頼むしかない。行政から見たら怖いことなのだけでも、やっぱりそれをなるべく中核に置いて広めていこうと、そういうふう新しい大きな政策転換が行われた。

○子供、障害者、要介護者、生活困窮者への地域の力

地域の助け合いの力を頼むというのは、高齢者の要支援者に対する生活支援だけではありません。子育て支援、去年法律が変わっていろいろ新しい仕組みが打ち出されて、幼保一元、幼稚園、保育園を一緒にすることばかり注目が集まっていますが、幾つかの政策の一つの柱に地域で子供を支えよう、子育てしましょうと。地域に子育て拠点、例えば図書館を子育て拠点にして、子育てに参加しましょうという方向がある程度打ち出された。それまでの子育てっていうのは、戦後の子育てはだんだん親の責任、そしてそれを支えるのは学校とか保育園、幼稚園という施設、親と学校、幼稚園、保育園等の仕組みと。これだけになってきて、昔地域で支えていた子育ての仕組みがなくなってきた。

ところがここへ来て地域の力も借りましょうという方向が出てきた。これもいいことです。地域には子供の好きなおじいちゃん、おばあちゃんがいますから、自分の孫を見ようとしたらもうそんな古いやり方は子供がだめになるからなんて自分の娘に叱られて、子育て、孫育てから排除されているおじいちゃん、おばあちゃんが結構増えてきている。いろんな人が子育て、孫育てに参加する。近所のそういった子供たち育てに参加して子供たちは円満に育っていく。親が一番たくさん子供に言う言葉を御存じですか。明白なのですが、「早く、早く」です。そこへゆったりとおじいちゃん、おばあちゃん、「よくやるね」と言って、子供たちは自信を持って育っていくわけです。だから、地域の力、参加する、子供たちにとってもいいことです。子供も地域の助け合いの力が要る。

障害者は去年自立支援法が総合支援法になって、法律にはっきり「地域の共助で支えていこう」と大きな目的が冒頭に打ち出されて、その方向へ進んでいます。障害者だからって言って閉じ込めたりするのではなくて、みんな一緒の中で暮らしてく大事なことで、こちらも地域の力が要る。

認知症者、去年オレンジプランが打ち出され、その中「地域で支えましょう」と地域生活を推進する仕組みもできて、早く地域で発見して地域の中で一緒に同じように暮らせる仕組みを作ろうという大事なことです。認知症者はいろんな力が残っているので、それを閉じ込めてしまうのではなく、地域の中でその

人らしく暮らしてもらおう。みんなで徘徊訓練なんてやっている市町村が出てきています。「徘徊者を見かけたらおうちに帰しましょう」と。安全のために何もしないよりはいいのです。けれど、おうちに帰す徘徊って変な言葉ですけど、歩きたいから歩いていられるのです。歩きたいなら安全なように歩いていただきましょうと。買い物に行きたいなら買い物してもらいましょうと。お金を払うのを忘れて帰ったら後でお家からいただければいいじゃないですか。そこまで地域で支えましょうと。そうなるこれは相当な地域の力が要ります。これも大きな力が求められる、認知症者。

もう一つ、生活困窮者と言われていますが、究極はひきこもりの方々、ニートの方々、これは統計がないのですが増えています。一度社会に出たけれど、厳しい冷酷非情な使い方にとっても耐え切れない。心傷ついておうちに引きこもってしまうという青年、中年増えています、明らかに増えている。そういった方々って親がなくなればもう生活保護へストレートに直行ですよ。そうじゃなくて、まだまだ能力、引き出せば意欲もいっぱいある。これを地域で引き出して、そしてそれぞれの役割を果たしてもらって、中間就労でも、NPOの世界でもいいです。人と一緒にやる気持ち、意欲を取り戻して社会でその人らしく生きてもらおう。これは大事な仕組みです。去年その仕組みができ、現在試行期間で、全国市町村は一生懸命取り組んでいる。

○地域を支える高齢者の力

今言ったようなそれぞれの仕組み、高齢者の介護保険制度の改正や、子ども・子育てプラン、障害者の総合支援法や、認知症のオレンジプラン、生活困窮者の支援事業など、それらのプランは全部去年できた。役所のことですから別に相談してつくったわけじゃない、ばらばらにできている。例の縦割りです。縦割りでいろんな分野の制度が大きく変わった。全部お金がない中で、もっと良い暮らしをしてもらいたい、前進している仕組みです。

そのどういうふうに進めるかのところで、全部地域の助け合いの力が要る。地域のどの力か、一番大きな力はおじいちゃん、おばあちゃん、いわゆる高齢者だろう。なぜならば、地方に行き昼間バスに乗ったら、ウィークデー、大体おじいちゃんとおばあちゃんですから。みんな元気に出ていかれ、まだまだ力がある。この大きな力はあったかい力です。人の心を癒し、前に押し進める大きな力です。これを生かして暮らしやすい、いい社会にしていこうと、期せずして福祉の仕組みが地域の力を借りる、生かす方向に変わった。去年から今年にかけての状況で、来年から全国実施とか、2年、3年の試行を経るとかいろいろありますけれども、全体が地域で支える方向に進んでいることは間違いない。

我々はそれをどう受けるのか。去年、要支援者の生活支援をどう支えるか、そういう活動をしている中央のいろんな団体、我々が集まって議論しました。「勝手に我々に相談なしにあっちもこっちも全部地域、地域へ持ってきて当てにされても困るよね」とか、「仕切られたくないよね」とか、もちろんそういう声もありましたけれども、やっぱり全体状況を見たら我々が頑張るしかないだろうと、素直に考えてそれしかない。

ではどう頑張るか、今までも一生懸命やりましょうとあって、そんな全部動くようなところまではなかなか来ない。志がある人と言っても全体から見たら少数なので、特に当てにしていた団塊の世代、お金を稼ぐほうは頑張ってもらえるけれど、なかなかこっちに来てくれないよね、こんな状況で大丈夫なのかと、そういう議論もありましたけれども、頑張ってもらえる限りやるしかないだろう。そういうふうにして新地域支援構想会議と言うのですが、全国団体、社協さんや生協さん、農協さんとか、もちろんNPOの代表たちにも入っていただき、去年の暮れから助け合いを格段に進めようという運動を展開してきているところであります。

○行政と地域の協働

私ども去年の3月から全国都道府県を回り、行政の担当官や、社協の地域福祉の担当の方、NPOの方々、支援組織の方々、そういうリーダーたちに集まってもらってどういうふうにして助け合い活動と協働して、行政や社協等々がうまく助け合いの支援組織のリーダーなどと協働して助け合いを広めていくのか、その勉強会をずっと開いています。去年の3月から始めて37か所やりましたが、県内の3分の2ぐらいの行政の責任者が来てくださり、社協も来てくれて協議をしてくれています。

今日このあとのフォーラムでそういう事例がいろいろ出るとは思いますけれども、今まで37やって全部成功でした。私がコーディネーターをやりますので、最初に「今日のこのパネルディスカッションは『新しい状況に応じてみんなで助け合いを広めて、要支援者の生活支援ぐらいはできるところまで頑張るって進めましょう』と、そういう訴えをするフォーラムです。帰る時に『何だやっぱり助け合いって言ったってなかなかそう簡単に広がらないし、これはだめだわい』と、『助けてやるというのは無理だよ』と、そう思われたらこのフォーラムは失敗です。そうじゃなくて、『いろいろ確かに問題はありますがみんなで頑張ればやれるよ』と感じていただいたら成功です、そういうふうにして申し上げまして、いろいろメッセージを出して

パネリストにも頑張っていたでいて、最後に私が「いろいろ問題はあるけれどもみんなで頑張ればやれるよと思っていただけましたでしょうか」と聞きます。今まで37回各県でやってきたのですが、ほとんど全員拍手をいただいた。大体皆さん、やれるよ、頑張ってやろうって言われる。全国北海道から沖縄まで、やっぱりみんなでやればやれるのだと、たくさんの方々が感じていただけるということはもう自分でもやるし頑張ろうと思っていたでいてるのだということだと思ひます。だからそういう流れは確実にある。これをみんなで確かに進めていきたい、そういうふう願ひております。

○人のためになる、助け合う生き方

この助け合い、先ほど申しましたように、当てにならないという大きなマイナスがある。この助け合いで生活支援、要支援者を全国一律に支えるようには絶対にかない。これが助け合いの大きな欠点です。欠点があるのに制度としてどうして助け合いをやるのか、やらなきゃいけないのか、ここが一番のポイントですよ。

助け合い活動、あるいは社会参加活動の何がいいのか。行政がつくる介護保険のいろんなサービスとか、医療サービスとかそんな仕組みに比べて、助け合い、一律にはかないという欠点があるのにどうしてそれが必要なのか、大切なのか。一番大きな点を二つ言えば、まず、助け合い活動をやる方が元気になる、生きがいを持つ、ここが助け合い活動のほかのいろんなサービスに比べて決定的にいいところですね。もちろん介護サービスをやっておられるヘルパーさんたちも生きがいを持ってやってくださっているし、お医者さんだって人助けだと思ひてやっているお医者さんもある。お金が一番のお医者さんも結構多いですけど、赤ひげのお医者さんもばらばらおられます。もちろんやりがいを持ってやっておられる。

だけど助け合い活動はお金じゃないから、なぜやるか、自分がやって快いからですよ。その快さってというのはスポーツとか、映画を見るというのとはまた違ひ。自分の能力を發揮して、誰かが喜んでくれた、やったということが自分の生きがいに直結する喜びですね。これがあるからお金にもならないのに、疲れるのに頑張って一生懸命助け合い活動をやる。そしてやっている人は元気です。これが助け合い活動、あるいは社会参加活動の一番いいところですよ。我々の仲間を見ても、寒くなって風邪をひいている人でも出ていきますよ。あの人が待っているから行かなくやと云って。やって終わった頃には鼻をくすくすいっていたのが治ってしまひていますよ。夢中でやっているうちに元気になって、だから少々の病氣ぐらい吹っ飛ばしてしまひ。もうこれがなくては生きていけないぐらいになっていますから、そういう人たちってがんになっても、体が不自由になってもやっていますよ。

あんたもう面倒見てもら方だろう、まだやるの、と思うのだけ車椅子でも出かけるし、がん病棟に入って、ホスピス病棟に入っても外に出ていけないとなっても、やっていますね。ベレー帽をかぶって、背広ネクタイで何をやっているといったら、墨絵。墨絵が得意なのです。だから自分は墨絵を教えたい。ホスピス病棟でじっと死ぬのを待っているのは嫌だ。96歳で、ボランティア仲間に墨絵を習いたい人を集めて来てよって、集める方も苦労しまひました。ホスピス病棟に行かなくやいかんのなんて知りませんから、習う人は集まらなかつたのだけ、いやあそこに行つて習つたらふれあい切符をあげるからって助け合いの切符をあげることにして何人か墨絵を習っていました。習っていると上手になりますからね、年賀状ぐらい絵が描けるようになって、そんな切符なんかいいよ、習いに行くからって云って。2年医者の見通しよりも長生きして、ホスピス病棟長期滞在記録、一生懸命墨絵を教へて。だから生徒さんも結構上達して、最後は皆さんに見守られて大往生されましたけど、そういう方たくさんいます。どんな状態になつたって人の役に立てる。能力を發揮される人がありがとうといつてくれる、これが大きな元気のもとであり、生きがいのもとであり、いい人生ですよ。いつ死が来るのかばかりを思っているよりも、人と交わつて墨絵が上達しまひたなんて言われて、いい毎日を送つて本当にいい人生だと思ひます。別に墨絵に限らないいろんな生き方ができる。だから、人の役に立つてことはやっぱり嬉しいことです。

アメリカでは寄附は最高の贅沢と言ひていますが、人の本当の究極の喜びというのはお金では買えない。自分の能力を發揮して、寄附も含めて人様のお役に立つていうのは最高の贅沢だと言ひておりますが、そういう最高の贅沢を味わえて、最高の自分の人生を送れる。これが助け合い活動、社会参加の一番意味のあるところですよ。

もう一つ大きいのは、例えば要支援者、生活支援をやつたとする。これ、相手方、助けてもらう人もまた人を助けたりするのだけ、行って車椅子を押してもらつて散歩するとか、買い物に行くとかいろいろ人に助けてもらう。

それと、介護保険のサービスもそういうサービスあるわけですよ、今まで要支援者にやってきた。これはお金の仕組みでやってもらっていた。これはどう違ひ。普通介護保険の議論をしていると、そりゃ介護保険のサービスの方がいいだろうと、専門家が専門的な能力でサービスするのだから、そんな素人の集

まりでやってもらうよりもいいだろうと、もう大体みんなそう思っていますよね。もちろんそういう専門的な技術があることはそのこと自体は素晴らしいことだけでも、私がこの分野に入って確かめたことがあります。

例えばお風呂に入れて差し上げる、入浴サービス。これを介護保険のサービスで、例えば週に2回は介護保険の要支援者に対するサービスの訪問介護でお風呂に入れにきてくださるヘルパーさん。けれど夏場は週に2回じゃもう2回ぐらい入りたいようなんで方がおられる。これは介護保険のサービスではそこまでいかないので助け合いの素人さんですよ。助け合いの方が行って入浴サービスをしている。だから同じ人が一方ではプロの入浴サービスを受け、一方では助け合いのボランティアのサービス。同じ入浴をさせてもらうというサービスを受けているのです。

いろいろ聞いてみた。答えはみんな一緒だったのですが、介護保険のヘルパーさんにお風呂に入れてもらっているときは安心だと。それはそうですね、きちんとした技術がありますから。助け合いが安心じゃないといっているわけじゃないですよ。浴槽に落としたりはしません、技術があるから介護保険のサービスのほうが安心。じゃあ、ボランティアさんの入浴サービスはだめなのか、いえあれはどうしてもしてほしい。それは、入れてもらっていると楽しい。だから、助け合いでやっていますからただお風呂にきちんと入れるそれだけじゃないですよ。いろいろお話をするから入れてもらっていて楽しい。楽しくなってもらうためにいろんなサービスをやっているのですから、一層いいお話を。この楽しさが何とも言えないという気持ちがあるからそういうお話が出てきて、楽しさが伝わる。

○自信から生まれる自立

助け合いは相手がやれることはやりません。介護保険は、例えば料理は、少々ネギが切れるおばあちゃんでもネギを切るのを待っていたら時間が足りなくなりますからついやってしまいますけど、助け合いの方は時間の制約はない。相手に自立して少しでも元気になって欲しい気持ちがあるから、「やれるでしょう、待っているからやってみて」と。例えば車椅子に移れますよと、車椅子をしっかりと持っているから移ってなどやっています。移るほうは何か体が不自由なのを人に見せるのは嫌だけど、いざというときは支えてくれるからって自分で車椅子に移る。移れないかなと思ったのが移れるとやっぱり嬉しいのです。移れる、自分はこれをやれるのだと本当に嬉しそう顔をされる。自立というのは、自信ですね。そういうことだと思います。そういうふうにはっきりと励ましながらやってもらい、やれないことは遠慮しないで何でもやるから言っで。遠くてもあそこへ行きたいと、車椅子で行きたいなら散歩と一緒に行くからって、遠慮せずに言っで。だから、やれないことについてははっきり支援するけれども、やれることについてやらない。これがやってもらう方の自立、それを助け合いでやっています。

○相互の生きる喜びを生む助け合い

助け合いというと、何か質が落ちるようなそういう評価があるけれども、確かにテクニックとしては落ちる点はあるのでしょうけども、そのかわりお金では絶対提供できない心の交流、自立の元気だけ。何よりも自分が大きな力をもらう、生きる喜びをもらう、ここが特徴です。これはお金の仕組みでは提供できないので我々が提供するしかありません。

折しも最初に申し上げたようにいろんな制度がそういう地域の力、皆さん方の力を借りて、誰もが楽しく暮らせる、その人らしく暮らせる社会をつくろうと動いてきているわけですから、やはり応えましょう。ぜひぜひみんなで進めていきたいと思います。

最初に申し上げたメッセージ、「高齢者の新しい生き方、お金だけで幸せになっていこうというのではなく、みんなで支え合いより元気で生きがいのある社会を作り出していこう」と。その先兵として働きかけましょうということは、今も申し上げたような助け合いというのが素晴らしい幸せ、お金では買えない幸せを自分にも相手にももたらすから、そういう性質のものだからですね。

○語って伝えていくボランティア活動

皆さん方、もう実感しておられるとおりでですけども、助け合い活動をどう広めるのか。これはいろんな仕組みがありますが、何と言っても口コミが一番ですね。皆さん方がやっておられる活動を、やっている活動の楽しさを語っていただく。自分がやっているボランティア活動、助け合いの活動、地域の活動、社会参加活動の楽しさを、そのやっている時間と同じぐらいいろんな人に語っていただく、これが広める一番の方法です。みんな集めて話をし、やっている人がその自分の活動について、「私はこの活動を始めてからこんなに体の調子がよくなったよ」や、「毎日が楽しくなったよ」とか、「妻との、あるいは夫との仲がとても楽しい、いろんなお話をすることになってとても話し合いをするいい仲になったよ」とか、「子供が何となく見ていて自分もやり出した」、「何かボランティア活動をやり出したみたいで元気になった」など、素晴らしい出来事が起こります。これをどんどん語っていただき、日本には陰徳という考えがあって、

なかなかそういうことを語ることをしないのですが、アメリカのボランティア活動は、もう自分のやっているボランティア活動と同じ時間人にそれを語り、そのすばらしい体験を分かち合うことに使いましょと、そういうのが普通ですよ。だから一生懸命語る。されている体験をどんどん語っていただき、その生き方のすばらしさを人に分かち合っていたきたい。それが最高の進め方だと思います。

○助け合い活動の創出

これはこの事業が始まってから助け合い活動をどう広めるか、私どもこのガイドブックみたいなものを使って社会参加のあり方を進めています、そのテキストを使わせていただきます。これは今度助け合いを広めるためにというのを介護保険制度、要支援者を支える仕組みの中で国がつくることになって、その生活支援コーディネーターはお金が出ます。

それを支える協議体、団体のリーダー、NPOなど、そういった方々がそれを支えて、助け合いを広めていこうということで、国も助け合いを中核に委ねるわけですから、こういう仕組みをつくりました。神戸市は、見守り推進員でしたか。震災の後、地域包括支援センターにそれぞれお一人ずつつけてやってもらえるので、その方がこういう役割を果たされるのだと思うのですが、そういう助け合いを広める仕組みは、お金が出て始まりますので、それを支える協議体の構成員、どんどん手を挙げていただいて、一緒に助け合いを広める活動を合わせてやっていただければうれしいと思います。今日、午前中に表彰されましたような灘区の田邊さんとか、賞をもらったらおしまいですが、これに協力するしかない。協議体構成員をやって、大いに活躍していただければ、うれしいなと思います。



どういう風にして構成員を広めていくかという観点から作ったテキストです。「さわやか福祉財団」ホームページを見ただけであればアップしておりますので、いろいろ御活用ください。

その中に、高齢者の社会参加という項目があって、高齢者の社会参加、社会に貢献しない生き方を恥とする高齢者の生活文化の確立と、これ狙っています。ただ言うときは、もう少しやわらかにいきましょう。市民大学とか、塾とか、結構あります。神戸市も、この後のパネルディスカッションに登場される中村順子さん、兵庫県の社会貢献塾、コミュニティ・サポートセンター運営で頑張ってやっておられます。これ狙い目です。ここに、ちょっと引用させていただきました。この順子さんのやり方の特徴は、実践に結びついている。ただ学ぶだけというのではなくて、その人がどんな方向を向いているのか、どんな社会貢献活動が向いているのか、これ人によってやっぱり違います。おしめを替えたりする、それを好きよという人もいれば、高齢者はいいよなんて。高齢者って、結構高齢者嫌いなんですね。子供をやるよなんて子供の方を一生懸命やる人とか、やっぱり向き不向きがありますから、向きを初めから確かめておいて、うまくそちらに誘導するって、上手なやり方をしておられますから、そういう実践に結びついた市民大学とか、塾とか、ここはもう出た方、全部誘い込みましょう。

足りない助け合い活動の創出 (各論) | 3-8. 高齢者の社会参加

・ 高齢者を支える層として期待できるのは高齢者層
・ 社会に貢献しない生き方を恥とする高齢者の生活文化の確立
・ 高齢者を社会参加に誘う多様な仕掛け

足りない助け合い活動の創出 (各論) | 3-8. 高齢者の社会参加

1. 市民大学・塾

高齢者の参加意欲を引き出し、実務の社会参加活動につなげる講座の設定

- 市民大学の主体
 - 習熟者の割合が少なくないが、NPO等の習熟の機会も意識的な対応をしている
- 講座の構成
 - 講師には、実務経験者も多く選定し、実務経験を重視
 - 受講生の選定を重視し、適切な講座に誘導する
- 実務活動とのマッチング
 - 受講生を指導できるボランティア活動を準備し、なるべく習熟した受講生、習熟した者に社会参加できるような指導をする

【例】 習熟した高齢者層
 ・ 神戸市が中心のコミュニティ活動推進課・特別支援活動サポートセンター
 【例】 習熟した高齢者層
 ・ 東洋館神戸市立総合老人大学 (講義・仕立講座)
 【例】 習熟した高齢者層
 ・ 市民大学「高齢者の学びと支援の場」
 【例】 習熟した高齢者層
 ・ 高齢者向け学習塾「高齢者学習塾」
 【例】 習熟した高齢者層
 ・ 高齢者向け学習塾「高齢者学習塾」

足りない助け合い活動の創出 (各論) | 3-8. 高齢者の社会参加

2. 家族・友人

家族や友人からの勧めが、極めて有効

↓

・ 活動意欲が、友人や家族に対し、活動の楽しさを語り、参加を勧めることが、活動することと同じくらい重要
・ そのことを活動者に伝えるように、生活支援コーディネーター・近隣連携委員は、助け合い活動のリーダーに対して注意喚起

足りない助け合い活動の創出 (各論) | 3-8. 高齢者の社会参加

3. 地縁組織 (町内会・自治会、新組織)

住居の参加が活発でない地縁組織のリーダーに対し、例えば以下のような活動で住民が活躍できるものを企画・実行するよう勧める

【地縁組織の活動事例】

- ① 認知症対策、精神のための福祉体操など
 - 体操後の話し合い
- ② 夕字も取り寄せるための活動
 - 読書の会
- ③ 地域課題抽出のためのワークショップ
 - 住みやすさのための話し合い
- ④ 読書・見聞
 - 身体の不自由な人の話し合い
- ⑤ イベント
 - 散歩、ラジオ体操
- ⑥ 講座
 - 住づくり講座、文化系、体育系各種
- ⑦ 学習塾
 - 町内保護人・ボランティアの講座
- ⑧ 事業
 - 歌謡、カフェ など

⑧ 月に男性を勧誘する方策としては、単独で「男性企業OBの集談会」(50・50アワー) 開催

⑨ 地縁組織の活動の情報を住民に情報公開することが有効

足りない助け合い活動の創出 (各論) | 3-8. 高齢者の社会参加

4. NPO

NPOに対し、社会参加の促進活動を行うよう働きかける

- ボランティア活動の普及とNPO等中間支援団体
 - ① 食生活の改善に役立つ食生活改善講座を行う
 - ② ボランティア活動を受け入れる組織を構築するよう働きかける
 - ③ 地域課題抽出のためのワークショップを開催する
- 上記以外の活動をしているNPO
 - ④ 地域課題抽出のためのワークショップを開催する
 - ⑤ それぞれの活動の魅力を広げ、ボランティアの参加を促す活動にも力を入れる

【活動の促進活動】

- ・ 高齢者ボランティアセンター (仮設)
 - 【目的】 高齢者のボランティア活動の促進、活動の普及と実務、活動拠点との交流を推進している
- ・ 神戸市ボランティア情報センター (仮設)
 - 【目的】 市内のボランティアセンターにボランティアコーディネーターを配置し、ボランティアを呼び込むためのボランティア活動の促進に努めている
- ・ 高齢者ボランティアセンター (仮設)
 - 【目的】 高齢者ボランティア活動の促進とボランティアの参加を促す活動、実務活動に特化した高齢ボランティアセンターが設置されている

それから、家族、友人に勧める。さっき言ったようにロコミ、一番有効です。特に女性の方々は、やってない御主人、多いと思うのですね。御主人をいかに社会貢献活動に引っ張り込むか、それであなたの人生が御主人と一緒に楽しめるものになるか、御主人と切り離れた別々の味気ない人生になるのか。御自分はやっておられるから楽しいでしょうけど、家にごろごろ寝たきりのぬれ落ち葉がいるのは気になるじゃないですか。やっぱり思いっきり人生楽しみたかったら、まず御主人を引き込んでほしいですね。頑張ってください。なるべく御主人のお世話をしないこと。これが引き込むコツです。食事から何から全部準備するから自分でやらないので、是非御主人を自立させるために世話をせず、したくてもぐっとこらえて、自分の楽しい人生を送る、それが御主人を引き込むコツだと思います。

地縁組織、これが大きいですね。やっぱり一番入りやすいですから。もういろんな活動があります。ここにあるような活動をやっていますので、活動をやっている自治会があればそれに参加すればいい。やってなきゃ自分で作り出せばいいです。自治会の会長なんて、大体持ち回りですよ。1年交代で、あれじゃあいい活動起こらないですよ。自分がやるぞとやって、朝の体操を始めてよし、子供の通学を見守る活動を始めてよし、みんなが集まる楽しい催しや学習のある集会場にしてよし、もう防犯活動の拠点にしてよし、いろんなイベントをやつてよし。そういうふうにはまず地縁のつながりを生き生きとしたものにする。これが一番やりやすいパターンですね。火の用心でもいいです。駐車場の整理をみんなと一緒にやってよし、市から清掃を請け負って、事業者の半額ぐらいで仲間と一緒に請け負って、掃除が終わったら、ちょっとした謝礼金をもらって、それで朝から仲間と一緒にビールを飲んでよし、楽しくやりましょう。やっぱり地域のつながり、これがベースですよ。NPOがありますし、経営団体に働きかけるのもいいし、公民館と学校、公民館はあんまり活用されていないようですが、神戸は学校の活用、随分進んでいるようです。

学校施設開放事業、神戸市がやっておられて、全国に先駆けて学校が地域の助け合いの拠点になっているそうです。学校ですから地域にあります。そこに顔を出していただいてよし、表彰制度です、今朝もあったようですが、やっぱり会った仲間、褒め合うことは良いことですよね。

足りない助け合い活動の創出 (各論) | 3-8. 高齢者の社会参加

5. 経営者団体及び企業 (続)

【社会参加促進の無料の例】

- ・ 日本経済団体連合会
 - 「自営企業市民」として、積極的に社会貢献活動を行う社会貢献を推進することを軸とする活動が主である。人と人との絆をつくる活動も中心である。企業活動はその絆を再生する機会を誘っている
- ・ 経済同友会
 - 21世紀を生き抜く企業経営者より多く環境が変化する多目的、「企業社会責任」の重要性を「CSR (Corporate Social Responsibility)」という言葉であらためて提言し、その実践を推進している

【活動の促進活動】

- ・ 高齢者ボランティアセンター (仮設)
 - 【目的】 市内のボランティアセンターにボランティアコーディネーターを配置し、ボランティアを呼び込むためのボランティア活動の促進に努めている
- ・ 高齢者ボランティアセンター (仮設)
 - 【目的】 高齢者ボランティア活動の促進とボランティアの参加を促す活動、実務活動に特化した高齢ボランティアセンターが設置されている

足りない助け合い活動の創出 (各論) | 3-8. 高齢者の社会参加

6. 活動拠点 (公民館・学校)

公民館や学校を社会参加の活動の拠点とする

1. 公民館

- ・ 公民館を「生涯学習センター」(仮設) などに名称変更・転換して活動の拠点とする
- ・ 公民館の役割及び運営に関する標準 (平成15年文化庁学芸部告示)
 - 第5章 公民館は、ボランティアの養成のための研修会を開催する方法により、ボランティア・体験活動に関する学習機会及び学習情報の提供の充実に努めるものとする

【活動の促進活動】

- ・ 高齢者ボランティアセンター (仮設)
 - 【目的】 市内のボランティアセンターにボランティアコーディネーターを配置し、ボランティアを呼び込むためのボランティア活動の促進に努めている
- ・ 高齢者ボランティアセンター (仮設)
 - 【目的】 高齢者ボランティア活動の促進とボランティアの参加を促す活動、実務活動に特化した高齢ボランティアセンターが設置されている

足りない助け合い活動の抽出(各議) | 3-8 高齢者の社会参加

6. 活動拠点(公民館・学校) (続)

2. 学校

※学校は、さまざまな活動に積極的に関与している

- 平成5年 文部科学省「余暇教育活用指針」
生涯学習のコースに導入するため余暇教育の必要性を助める
- 平成10年 中央教育審議会答申「今後の地方教育行政の在り方について」
学校を地域コミュニティの拠点として地域住民の様々な学習、交流活動の場として活用

活動の広がる事例

- 神戸市 宇治原幼稚園(兵庫県) (兵庫県)
【特徴】宇治原幼稚園運営委員会(宇治原の地域住民)によって運営される民間施設。幼稚園での学習、交流の場だけでなく、活動の場として、人々の交流の場にもなっています。それを軸としたコミュニティ活動が広がっています。



足りない助け合い活動の抽出(各議) | 3-8 高齢者の社会参加

7. 情報・表彰

表彰制度を広める

社会参加のモデルとなる活動の情報を集め、マスコミ、IT関係等の情報発信者等にその情報を提供する

活動の広がる事例

- 『企業ボランティア大賞』(公益財団法人日本ボランティア協会)
【特徴】賞状と賞品が授けられ、NPOがボランティアの社会参加活動を表彰する制度
- 『アライチー・モデル・アワード』(特定非営利活動法人アライチー・モデルの会)
【特徴】賞状と賞品が授けられ、NPOがボランティアの社会参加活動を表彰する制度
- 『NPOバンクプロジェクト最優秀地域社会貢献活動賞』(NPOバンク)
【特徴】NPOバンクは、NPOバンクの社会参加活動を表彰する制度
- 『地域貢献活動の表彰』(公益財団法人)
【特徴】公益財団法人ボランティア協会の一環、地域社会の発展に貢献しているボランティア活動を表彰する制度



足りない助け合い活動の抽出(各議) | 3-8 高齢者の社会参加

8. 男性企業OBの参加促進

男性企業OBを助け合い活動に入れる方法をまとめる

男性が得意とする分野の活動に誘い入れる
【男性が得意とする分野の例】

- 防災活動、移動サービス、車いす運転、教育・観光ボランティア、事務・IT系の編集ボランティア、寄付活動、行政との交渉、広報誌の作成
- 貴賓接待(大阪府枚方市)など、歴史文化の活動は男性が少ない
- 男性が得意とする分野を複数選んで活動している例もある(香川県高松市大谷地区APO「協働カード」を調査)

友人、妻など親しい人物から誘い込む
シャイでボランティアの言いにくい男性に誘い込むには効果的



足りない助け合い活動の抽出(各議) | 3-8 高齢者の社会参加

8. 男性企業OBの参加促進 (続)

- 地域に不足しているサービスの企画に関する情報を提供し、男性の果たすべき役割を提示して誘い入れる
社会貢献を奨励して役割を考えた男性に有効
- 賞状や金銭的評価に興味を示す男性に行動ボランティアを勧める
- 男性企業OBを特別な関心を持っていないボランティア活動に誘い入れる場合には、活動の興味、活動者との交流などの病気を踏んでその関心を引き出す



それから男性企業OBの参加。これが一番ポイントです。中身の解説はいたしません、男性OBをどれだけ誘い込むか、これが社会参加の中でもその活動が広がる一つのキーになりますから、そのコツを幾つか書いておきます。男性は、なかなか入ってこないのですが、うまく入ってくれば、力を持っていますから一生懸命やります。是非ぜひうまく企業男性を引っ張り込んで、彼らを幸せにしてあげてください。

さわやか福祉財団は、そういう企業男性の方がたくさん参加してくれている珍しい団体です。NALCも同様に、こちらに入っている人たちは元気ですよ。うちの財団も何人か80代、90代で亡くなられますけども、がんになって亡くなる少し前までボランティア活動を、病院のベッドでパソコンを使っているやってくれていますね。そして本当にいい人生だったと言って亡くなられる。やっぱり人の力になるっていうことは、その人の人生を輝けるものにする、そういうものだなあとということを実感しております。そういう人生、みんなでつくっていきましょう。

ご清聴どうもありがとうございました。